

2000年2月23日

榊原英資前財務官をIMF専務理事候補とする推薦文

日本は、榊原英資前財務官・現慶応義塾大学教授が、その交渉能力、IMFに関するビジョン、専門知識等からして、改革が求められているIMFのリーダーとして最も適切であると考えており、同氏を次期専務理事候補として推薦する。

榊原氏は、日本の大蔵省に長く勤務し、財務官の経験を含めて国際金融分野を中心に幅広く豊富な行政経験を有している。これらの行政経験を通じて、大局的な見地にたった政策立案、国際的な意見の調整などにおいて卓越した手腕を発揮してきた。また、マスメディアを通じても外部に積極的に訴えかけ、行政の透明性、説明責任の向上に貢献した。近年のアジア危機における対応の際に明らかであったように、危機時においても、常に的確な判断を行い、また、途上国、新興国の個別の事情、痛みを理解しつつ、グローバルな問題に取り組む能力を持っている。さらに、ミシガン大学から経済学博士号を取得しており、ハーバード大学経済学部客員助教授を務めるなど、強力なアカデミックなバックグラウンドを有している。エコノミストとしての能力や国際金融についての知識は、IMFエコノミストの経験を通じて高められている。

特に、近年においては、専務理事として不可欠である国際金融の分野において、自らリーダーシップを発揮して、国際金融システムの改革、安定化に貢献してきた。97年に端を発したアジア危機に際しては、我が国の財務官として同年8月の東京におけるタイ支援会合を主催したほか、多くのフォーラムにおいて主要な参加者として危機の影響を受けた国への支援、危機收拾のために積極的な役割を果たした。アジア危機に見舞われた諸国の経済回復を図る資金支援スキームである新宮澤構想の立案にも大きく関与している。また、経済のグローバル化のオポチュニティーとリスクの両面に関する洞察を踏まえ、IMF改革、国際金融アーキテクチャ改革に関して多くの提言を行ってきている。